

# 信州大学附属図書館におけるアクティブ・ラーニング支援 —「主体的な学び」を支える人的支援に向けて—

村 田 輝（信州大学附属図書館）

「アクティブ・ラーニング」を巡っては、教育学の研究者、小・中・高等学校から大学に至るまでの教育実践者、文部科学省の政策文書等によって、さまざまな観点から議論され、実践されており、「百家争鳴」の状況にある。これに対して大学図書館がどのようなスタンスで臨むかは悩ましい問題である。

一方で、大学図書館ではアクティブ・ラーニングが今日の隆盛を見せる以前から「ラーニング・コモンズ」の整備を進めていた。ラーニング・コモンズとは主体的で協働的な学習を推進するための場所であり、振り返ればそれはアクティブ・ラーニングのための学習環境に他ならなかった。大学におけるアクティブ・ラーニングの進展は大学図書館における取組みが起爆剤になったともいえるのである。

本稿では、アクティブ・ラーニングと図書館との関係について考えるとともに、信州大学附属図書館（以下「当館」）において進められてきたアクティブ・ラーニング支援の取り組みを紹介し、今後の方向性について考察する。

## 1. アクティブ・ラーニングとは何か

アクティブ・ラーニングについては、文部科学省の質的転換答申<sup>1)</sup>による定義が有名だが、元々は1980年代にアメリカの大学で開発された教育・学習法であるという。その後、さまざまな論者による定義が行われているようであるが、筆者はこの方面の専門家ではないので、深入りは避けたい。ここでは溝上慎一氏の著書<sup>2)</sup>に依拠しつつ、アクティブ・ラーニングがどのような性質を持つものなのかを大まかに整理しておきたい。

アクティブ・ラーニングは、「教える」から「学ぶ」への学習観の転換を体現する教育・学習法であるといわれている。それまでの一方向的に知識を「教える」講義を「聴く」だけの学習を受動的学習と見なし、そうではない能動的な特徴を持つ「学ぶ」学習として提唱されている。具体的には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う学習のことをいう。

では、「教える」から「学ぶ」への学習観の転換はなぜ起きたのだろうか。日本とアメリカでは異なる背景もあるが、概ね次のように説明することができる。

- (1) 高等教育が大衆化し、学生が多様化した結果、従来のままの教育法によっては、学生に理解させ、関心を引くことが困難になった。このことは学生の学力の高い大学においても起きており、研究重視だった大学の関心を学生の「学び」へと向かわせることとなった。
- (2) 社会状況が変化し、卒業後の仕事や人生に適応していくための技能・態度を持った学生の育成を社会が大学に強く求めるようになった。このような技能・態度を育成するうえで、主体的・協働的に「学ぶ」学習が有効であるとされた。

(1)が大学内の事情であるのに対して、(2)は大学の外側の社会要因である。両者が相俟って学習観の転換が行われ、アクティブ・ラーニングが今日の隆盛を見せるようになったといえる。日本においては文部科学省による政策誘導の側面（特に質的転換答申の影響）が大きい。文部科学省がアクティブ・ラーニングを唱導するに至ったのも社会的な要請に強く迫られてのことと推察される。また、当初は大学教育のフィールドで主唱され、実践が行われてきたアクティブ・ラーニングだが、現在ではむしろ初等中等教育のフィールドで議論され、学習指導要領の改訂を視野に入れた実践が推進されている。

大学教育から発したアクティブ・ラーニングが、教育界のみでなく社会全体のムーブメントと化しているようにさえ見える背景には、工業社会から知識基盤社会への転換があった。社会の目標が明確であった工業社会とは異なり、自ら課題を見出し、知識・情報を主体的に活用しつつ課題解決を図っていかなければならない知識基盤社会では、伝統的な教育の手法が十分に機能しなくなってしまった。そこで、知識基盤社会に対応した新しい教育・学習を推進するための合言葉としてアクティブ・ラーニングという用語が広く使われるようになっていいると考えられる。

アクティブ・ラーニングの手法には、調べ学習、レポート作成、グループ学習、フィールドワーク、実験・実習、ディスカッション、プレゼンテーションなどがあり、教室内・外、個人・集団での多様な学習活動が行われる。このようなアクティブ・ラーニングによって育成される技能・態度は、「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」に及び、講義を聴くことで育てられる技能・態度よりもはるかに広大なものであるとされている。

アクティブ・ラーニングの代表例としてよく課題解決学習（Project Based Learning）が取り上げられる。あらかじめ答えの決まっていない課題に学習者が個人や集団で取り組み、解決を目指した試行錯誤のプロセスを含むのがアクティブ・ラーニングの特徴である。アクティブ・ラーニングの目的が最終的には現実社会の課題解決に取り組むことのできる人材の育成にあるとするならば、そのフィールドは教室や学校の外へと広がっていく。学生が教室で得た知識に基づき、地域社会において社会貢献活動を行うサービスラーニングなどもアクティブ・ラーニングの好例である。アクティブ・ラーニングには様々な手法があるものの、教室内では完結し

ない性質を持っており、授業外における学習者の主体的な取り組みを前提にした授業の設計が必要とされてくる。

しかし、このようなアクティブ・ラーニングに対応した授業を企画し、継続的かつ効果的に実践することは相当な労力を要することで、教員ひとりひとりの力だけで推進することは困難であろう。教員集団による組織的な取り組みとともに、教室外からの支援も欠かすことができない。ここに図書館が学習支援者としての立場からアクティブ・ラーニングに関与すべき領域が広がっている。

## 2. 信州大学附属図書館における取組み

アクティブ・ラーニングは教員による授業の工夫のみでは十分ではなく、教室外における広範な支援と相俟って成立するといえる。「授業方法」の改革が必要であることはいうまでもないが、それを支える学習支援環境の整備が必要である。学習支援環境にはハードウェアとしての「施設・設備」、ソフトウェアとしての「人的支援」が含まれることから、ここでは「施設・設備」「人的支援」「授業方法」の3点をアクティブ・ラーニング推進のための3要素として捉えたい。

ここでは上記の3要素を踏まえつつ、当館がこれまでにやってきたアクティブ・ラーニング支援の取組みを紹介したい。

### 2.1 施設・設備

当館に限らず、多くの大学図書館がこれまでにやってきたアクティブ・ラーニング支援の取組みは「施設・設備」の整備であった。大学図書館に学生のための能動的学習空間であるラーニング・コモンズを設置することは、現在では常識となっている。しかしながら、日本に初めてラーニング・コモンズが紹介されたのは2006年<sup>3)</sup>のことであり、それ以前、図書館は一人静かに学習に取り組む空間であることが常識であった。この10年間に図書館のハードウェアは劇的に変化したのである。その背景に、社会状況の変化に伴う「教える」から「学ぶ」への学習観の転換があったことは間違いがない。

当館においても、先行大学に後れを取りながらも2015年6月に中央図書館がリニューアル・オープンし、ラーニング・コモンズが本格的に整備された。ラーニング・コモンズが整備されても、十分に活用されず、単に「おしゃべり」ができる閲覧室になってしまう例もあると聞く。ただ、当館では現在のところ、そのような問題は目立っていない。多くの学生は学習目的で図書館を利用しており、さまざまなアクティブ・ラーニングが図書館内で行われているようである。時期による増減はあるもののグループ学習室の稼働率も高い。学習環境のハード面の整備が学生の学習行動に与える効果の大きさを日々実感している。また、新しい図書館空間

は、各種講師によるセミナーの実施や地域と連携しての企画展示など、社会とのインタラクションの場としても活用され、学生に刺激を与えている。



グループ学習室での学習の様子

しかし、このような状況は、図書館における従来型の静寂な学習空間の必要性を減じるものではない。アクティブ・ラーニングに対応した授業の質の向上のうえでも、学生の個人的な学習のための時間・空間の充実は不可欠である。中央図書館では、自由学習スペース、共同学習スペースといったアクティブ・ラーニング対応のスペースとともに、サイレント・スペースを整備し、学生が個人で集中的に学習に取り組むことのできる空間を確保している。学生がこれらの多様な空間を往還しながら、時に単独で、時には共同で、主体的な学習に取り組んでいくことが企図されている。

なお、中央図書館リニューアルの経緯については、『信州大学附属図書館研究』第5号<sup>4)</sup>に特集記事が掲載されているので参照されたい。

## 2.2 人的支援

信州大学附属図書館では、高等教育研究センターの協力を得てライティング・センター<sup>5)</sup>を置き、授業と連携したライティング支援を行っているほか、大学院生によるラーニング・アドバイザー（以下、「LA」）を配置し、学年や学部を問わない学習相談を行っている。これらの人的支援はアクティブ・ラーニングとの繋がりを直接に謳っているわけではないが、主体的な学習者の育成を支援



LAによる相談風景



するという意味でアクティブ・ラーニング支援に相当するものだといえる。

中央図書館リニューアル・オープン以後の最大の課題は、ラーニング・コモンズを中心とした場の活用を図るための人的支援の充実であった。ラーニング・コモンズとは本来、グループ学習に適した机、椅子、ホワイトボードなどの設備を有するのみでなく、学習支援に必要な知識・技能を持ったスタッフによる人的支援も含め、利用者の学習を促すための一連のサービスを提供する機能的・空間的な場である<sup>6)</sup>。当館では中央図書館と工学部図書館に LA を配置し、学生に対する個別学習相談を中心とした学習支援を行っているが、平成 27 年度には LA の資質向上を企図したスタッフマニュアルを作成するなど、今後の人的支援の充実・拡大のための基盤整備のための活動を行った。しかし、LA は現在、中央図書館と工学部図書館にしか配置されておらず、他の学部図書館への配置や、異なる学部・キャンパスの LA が連携しての学習支援は今後の課題となっている。

ちなみに学外に目を向けると、金沢大学ではラーニング・アドバイザーをさらに発展させ、教室におけるアクティブ・ラーニング型授業を授業内外で支援する学生スタッフとしてアクティブ・ラーニング・アドバイザー<sup>7)</sup>を配置している。また、アクティブ・ラーニング推進に繋がるプログラムを図書館職員や LA が中心になって企画・実践している大学図書館も多く見られるようになった。ラーニング・コモンズ整備後の大学図書館にとって、人的支援を通じたアクティブ・ラーニング支援は今後もっとも可能性を持った分野であるといえる。

### 2.3 アクティブ・ラーニング型授業と大学図書館

アクティブ・ラーニングが直接的に実践されるのは授業においてであり、いかにアクティブ・ラーニング型の「授業方法」を工夫するかが課題である。情報リテラシー教育の一部を担う場合を除き、これまで大学図書館が直接的に授業に関わることは少なかった。しかし、課題解決学習や社会との接続を志向し、教室の外へと広がりを見せるアクティブ・ラーニング型授業は、今後図書館との関わりをますます深めることが予想される。なぜなら、教室の内外で学生が主体的な課題解決を行うことを基本に据えたアクティブ・ラーニング型授業は、学生の情報リテラシー能力の育成を抜きにして成立するとは考えられないからである。

アメリカでは、毎回の授業のために読むように指定されている文献の量は半端ではなく、これを実行しないではクラスでの討論に参加できないという。しかし、これは当然のことともいえる。知識・情報の収集と修得、活用への取り組みなしに、学生を教室で議論させておくだけで有効な学習が成立するとは考えられない。従って、大学においてアクティブ・ラーニング型授業を成立させるためには、学生が課題解決のための知識・情報を求めて図書館を利用する行動が組み込まれていなければならない。合わせてネット上に膨大に展開する玉石混交の知識・情報やツールを有効活用するためのリテラシーの育成が欠かせないことはいうまでもない。

また、アクティブ・ラーニング型授業においては、授業時間内にゆっくり理解したり考えた

りする時間が十分に取れないことが多くなるといわれる。そこで、学生が授業外において学習内容の理解の質を高めるための「個人的な学習時間・空間」が必要になる。従って、一見アクティブ・ラーニングとは関係ないように見える図書館の伝統的な静寂スペースが、アクティブ・ラーニング型授業にとっても重要な役割を果たすことになる。

以上のことから、アクティブ・ラーニングは、知識・情報が蓄積・提供され、様々なタイプの学習スペースがあり、ネット情報へのアクセス環境、人的支援の提供も可能な図書館を活用して行われてこそ、表面的でない内実を伴ったもの<sup>8)</sup>になるのではないだろうか。「施設・設備」「人的支援」「授業方法」の3要素の全てにおいて、図書館はアクティブ・ラーニングにとって主要なプレーヤーとならなければならないと考える。

### 3. 平成 27 年度学内プロジェクトによる活動

当館では、平成 27 年度に図書館におけるアクティブ・ラーニング支援体制整備を目的とした学内プロジェクト経費<sup>9)</sup>が措置され、LA の教育・研修体制の整備を中心とした活動を行った。このプロジェクトで得られた主な成果は、LA の育成と知識・ノウハウ継承のためのマニュアルを整備したことと、そもそも図書館における学習支援が何を目的にいかに行われるべきかを再考し、当館における学習支援のための〈基本理念〉を策定したことである。

ここでは平成 27 年度の学内プロジェクトによる活動とその効果を紹介する。

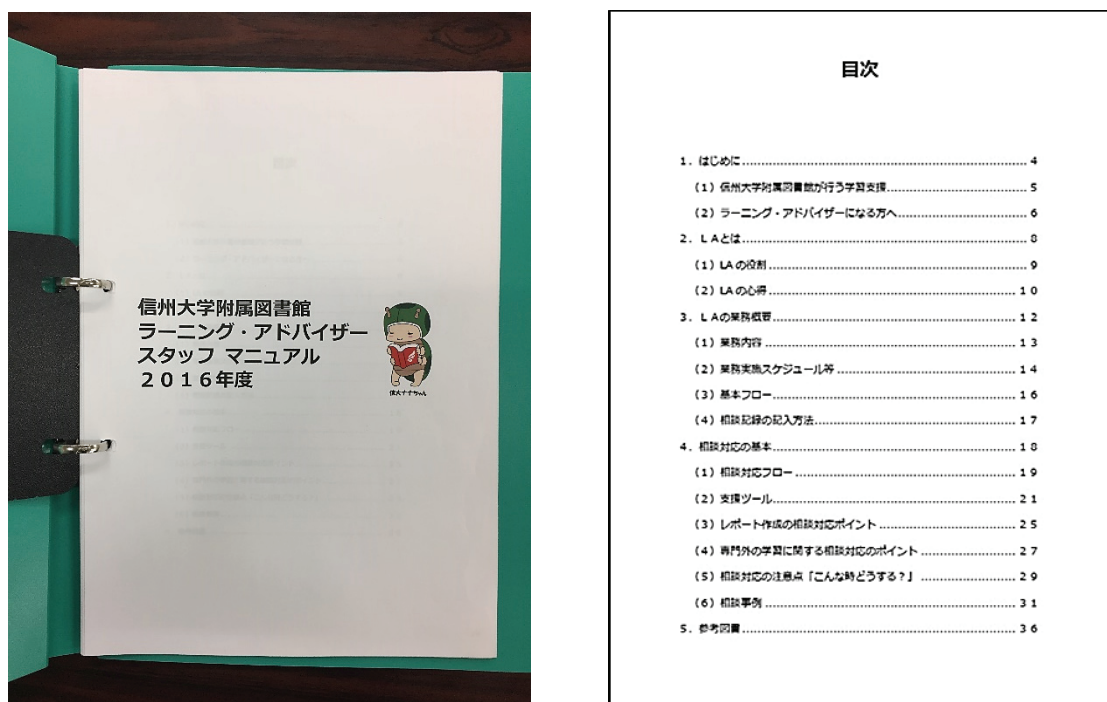
#### 3.1 LA マニュアルの作成

当館における LA は、平成 23 年 6 月から中央図書館において施行運用を開始し、平成 24 年度からは中央図書館及び工学部図書館において本格実施されていた。ところが LA 制度の開始に当たっては、他大学の先行事例を模倣しつつ、実践することが先行したことから、LA の意義・役割や基本方針が十分に考えられ、明確にされていたとはいえなかった。LA の支援内容も当初は図書館利用支援が中心であったものが、次第に専門科目等に関わる学習相談を中心としたものに変化していった。その結果、図書館サービス・業務の中での LA の位置づけが明確でなく、その存在や活動が学内で十分に認知されているとはいえない状態がつづいていた。

また、LA には大学院生を採用しており、すでに学習スキルや専門科目等に関する基本知識は身につけていることが前提とされていたことから、LA に対する教育・研修らしきことも行っていなかった。しかし、相談者が授業で出された課題の回答を求めてきたり、専門外の質問があったりした場合の対応など、LA が苦慮している場面は多く、学習相談の指針やノウハウを整理しておくことが必要であることは明らかだった。

以上のことから、当館では平成 27 年度の活動において、LA マニュアルの整備を行った。作

成過程等の詳細については、別途報告の予定<sup>10)</sup>があるので、そちらを参照されたい。参考までに、作成された LA マニュアルの表紙と目次を以下に示す。



LA マニュアル（表紙と目次）

このマニュアルには、LAの基本的業務である個別学習相談に関連する情報や知識・技能を中心に掲載しており、LAが相談業務を行う際に日常的に参照できる小冊子として作成されている。しかし、それに加えて注意を払ったのは、ラーニング・アドバイザーの意義・役割及びそのベースとなる基本理念を明確にすることであった。LAの成否を決めるのは、知識・技能もさることながら、LAが学習支援に臨む姿勢や心構えにあると思われたからである。

### 3.2 学習支援の基本理念

LAマニュアルの冒頭には、当館における学習支援の〈基本理念〉が示されている。この場を借りて紹介しておきたい。

#### 〈基本理念〉

- (1) 「信州大学附属図書館の理念と目標」<sup>11)</sup>に基づき、全ての学生に学習支援を行います。
- (2) 多様な個性を持ち、学習上のさまざまな課題や悩みを抱えた学生を援助します。

- (3) 学生と教職員の知的交流活動を促し、学生とその学生が必要としている人や情報をつなぎます。
- (4) 全ての学生が自律的な学習者となり、自ら課題解決を図れるようになることを目指します。

(1)の趣旨は、「全ての学生」という文言にある。図書館において学習支援を行う意義は、学部や学年にかかわらず、図書館が全ての学生に対してオープンな場所であるからである。学部や研究室等で行われる学習支援との違いがここにある。

(2)では、学生の個性が多様であり、学習上のつまずきのポイントも多種多様であることを踏まえたうえで、どのような「課題」や「悩み」にも向き合い、支援を行うことを表明している。一方で、図書館が行うのは課題の「解決」ではなく、解決のための「援助」であることも述べている。

(3)では、図書館が学生と教職員の知的交流を促す場であることを述べている。図書館は知識や情報を提供するのみでなく、学生と教職員を巻き込んだ各種プログラムの企画等を通して学生と学生が必要としているものをつなぎ、様々な手段と方法で学びを支援していくことを表明している。

(4)では、学生の主体的な学習を促し、学生を自律した学習者に育てることが図書館における学習支援の目的であることを表明している。裏返せば、課題解決を行うのは最終的には学生自身であり、図書館はその信頼できる支援者たることを目指すことを述べている。

この〈基本理念〉に書かれているとおり、当館における学習支援の目的は、様々な方法で学生を「支援」することを通して、学生を「自律した学習者」に育てることにある。「自律した学習者」とは、質的転換方針の言葉を借りれば、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材」と言い換えることができる。従って、〈基本理念〉が示している目標はアクティブ・ラーニングの目標とも一致しているのである。

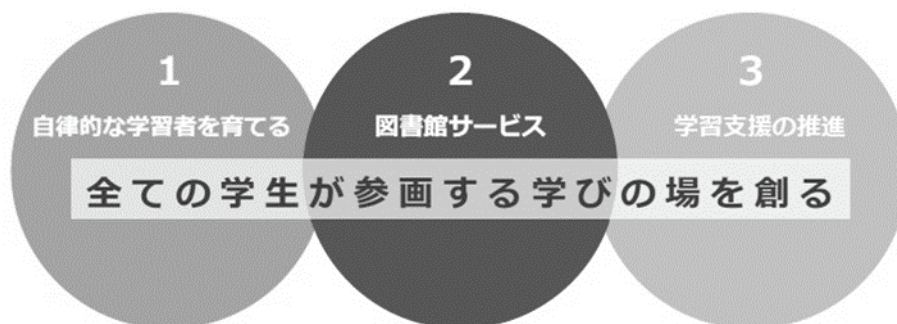
### 3.3 ラーニング・アドバイザーの意義・役割

平成 27 年度の活動の一環として LA との情報交換を行い、明らかになったことは、学生がしばしば授業で出された課題等の「答え」を教えてもらいに LA を訪れていることである。中には「試験に何が出るのか教えてほしい」と聞いて来る学生までいるという。そこで、LA マニュアルにも記載し、マニュアル作成後に LA に対して行った教育・研修の場でも確認したことは、学習相談の基本は「答え」を教えることにあるのではなく、LA と学生と一緒に考えることを通して、学生が自ら能動的に解決方法を見出すことを促す点にあるということであった。つまり、学習相談を通して学生を「受動的」な学習者から「能動的」な学習者に転換していくことを LA の役割と定めた。



もちろん、具体的に何をどのように行えば学生が「能動的」になるのか、回答は容易ではない。LAが学習支援に必要とされる種々の技能を身につけ、相談対応を行うことも必要であろう。それに加えて、情報リテラシー能力の育成が能動的学習者になるための必要条件となることに間違いはないだろう。学習支援が図書館で行われれば、学生が主体的に学習を進めるためのさまざまな資料やツールを紹介することもできる。図書館に設置されたラーニング・コモンズにLAを置き、学習支援を行う意義がこの点にあるだろう。

LAマニュアルでは〈基本理念〉を踏まえつつ、①自律的な学習者を育てる役割、②図書館サービスの役割、③学習支援を推進する役割の3点をLAの役割として明示し、それらの役割の遂行を通して「全ての学生が参画する学びの場を創る」ことをLAの上位目標として掲げている。②の図書館サービスの役割とは、図書館の行うレファレンス・サービスの一部を担ってもらった役割であり、図書館が持つ資源を活用した学習支援である。学生の情報リテラシー能力の育成に焦点を当てた支援ともいえるだろう。また③は、学習支援の活性化とレベルアップの方策を自ら企画・提案し、実現する役割である。しかし、LAが③の役割まで遂行できるようになるためには、種々のノウハウに加えてLA同士のコミュニティの醸成など、今後の相当の蓄積が必要であると感じている。



LAの役割と目標

ところで、なぜこのような学習支援業務を学生が担う必要があるのだろうか。LAマニュアルの「ラーニング・アドバイザーになる方へ」の節には、LAが原則として「学生が学生を支援する」仕組みである点を確認し、なぜ教員や職員ではなく、学生が学生を支援するのか、その意義と理由について説明している。その要点は「LAは教員や職員よりも心理的・社会的に学生を理解できる位置にあり、LAと相談者が共に学ぶ過程が有意義な経験になる」ということである。

LAに求められるのは、自身もまた学生であることのメリットを生かした学習支援である。「教員」や「専門家」のような熟練者ではないからこそ、LAは教員が気づかない学生のつまずきにも気づきやすく、学生に対して有意義な助言を行える側面があるのではないかと。もちろん、図書館で働く数人のLAにできることは限られている。全ての学生に対して、それぞれの学生に

適した助言（学習支援）が行われるためには、全ての学生が学び合い、教え合う、学びの場が創られる必要があるだろう。LA の上位目標を「全ての学生が参画する学びの場を創る」としている理由は、そのような意味においてである。

#### 4. アクティブ・ラーニング支援の今後

平成 28 年度に入ってから、中央図書館における LA の体制に変更があった。平成 27 年度には週 3 日だった相談対応を、全学教育機構の理工系の教員が LA に加わることによって、月～土までの週 6 日に拡大した。また、初年次生を対象とした「大学生基礎力ゼミ」で実施されるポイントラリーに「LA への相談」が加わった。これらのことの相乗効果により、平成 28 年度前期の相談件数は昨年度同期と比較して 88 件から 275 件へと大幅に増加している。学生は、一度 LA に相談することによって敷居が低くなり、リピーターになる傾向が高いようである。

この間、平成 27 年度に作成した LA マニュアルに基づいた研修やミーティングを実施し、大学院生 LA の資質向上にも努めている。LA を学生に周知するための広報活動にも力を入れている。LA に教員が加わった理由としては、数学・化学・物理を中心とした理工系の基礎科目に対する学習支援のニーズが高く、早急に対応する必要があったためである。平成 28 年度は予算が確保できなかったこともあって、学習支援に意欲的な教員が自発的に参加して LA 業務を行ったが、教員は授業や研究で忙しい。教員によるサポートを受けつつも、学生を中心とした LA 体制としていくことが望ましいだろう。

なお、学生 LA と教員 LA を比較すると、相談件数に差はなく、相談者から見た場合の優劣はないようである。個別対応を基本とし、相談に時間を要する LA に教員を配置することは有意義ではあるものの、効率的ではなく、持続可能な体制を組むのは容易ではない。大学内の人的資源は限られていることから、教員は基本的には教室での授業を行い、授業外における学習支援は学生に担ってもらおうという分担体制を取るのが効率的であり効果的であると思われる。

最後に、信州大学附属図書館におけるアクティブ・ラーニング支援の今後の課題を以下に列挙しておきたい。

- 平成 28 年現在、中央図書館と工学部図書館のみに配置されている LA を他の学部図書館にも拡大していくことが望ましい。また、各図書館に配置された LA を TV 会議システム等により結ぶことを通して、他キャンパスの LA の学習支援も受けられるようにし、他キャンパスに移動する学生等をサポートできる体制を整えたい。
- LA と授業を連携させることにより、LA を大学の教育・学習支援体制における必須要素としていきたい。なお、平成 28 年度は多くの初年次学生が参加する「大学生基礎力ゼミ」で実施しているポイントラリーの項目に「LA への相談」を追加してもらった。平成 29

年度には、初年次の数学授業において、復習問題の答えが十分に書けていない学生に対し、LAへの相談を義務づけていく計画もある。

- LAを増員し、より多様な分野に対応可能とするとともに、アクティブ・ラーニングに関する知識・技能を身につけてもらい、授業及び授業外においてアクティブ・ラーニングのサポートを行えるようにしたい。これを通して図書館を核としつつ大学内において日常的に質の高いアクティブ・ラーニングが行われる環境を整えていきたい。

以上の課題を念頭に置きつつ、本学のそれぞれのキャンパスの学習環境に即したアクティブ・ラーニング支援の方法を模索し、附属図書館全体として最適な学習支援体制を実現していきたい。

---

#### 注・参考文献

- 1) 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 2012.8.28,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)  
この答申では、アクティブ・ラーニングを次のように定義している。  
教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。
- 2) 溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂. 2014
- 3) 米澤誠. 動向レビュー：インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- 4) 特集：中央図書館のリニューアルオープン. 信州大学附属図書館研究. 2016, 5号, p.109-170, <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal05.html>
- 5) 加藤喜子, 小島浩子. 信州大学におけるレポート作成支援. 信州大学附属図書館研究. 2013, 2号, p.125-133, <http://hdl.handle.net/10091/16219>
- 6) ラーニング・コモンズについては次の文献を参照されたい。
  - ・ 加藤信哉, 小山憲司編訳. ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しいかたち. 勁草書房, 2012
  - ・ 溝上智恵子編著. 世界のラーニング・コモンズ：大学教育と「学び」の空間モデル. 樹村房, 2015

- 7) 金沢大学のアクティブ・ラーニング・アドバイザーについては、次のサイトに一連の情報が掲載されているので、参照されたい。  
金沢大学. 大学教育再生加速プログラム. <http://apuer.adm.kanazawa-u.ac.jp/>, (参照 2016-11-21).
- 8) 例えば次のページには、「アクティブ・ラーニング」が様々な答申・報告等でどのように記述されているのかが整理されており、わかりやすい。  
“アクティブ・ラーニングー審議のまとめ, 論点整理等, 諮問・答申・報告の記述内容ー”  
大分県教育委員会. <http://kyouiku.oita-ed.jp/saiki-k/2016/11/post-203.html>, (参照 2016-11-21)
- 9) 平成 27 年度戦略的経費 (PLAN“the FIRST”推進経費)「アクティブ・ラーニング推進に向けた学習支援体制の確立」
- 10) 村田輝ほか. ラーニング・アドバイザーのためのスタッフマニュアル作成の取組みー信州大学附属図書館における学習支援の理念と実践ー. 大学図書館研究. 掲載予定
- 11) 「信州大学附属図書館の理念と目標」は次を参照されたい。  
<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/philosophy.html>